国史跡

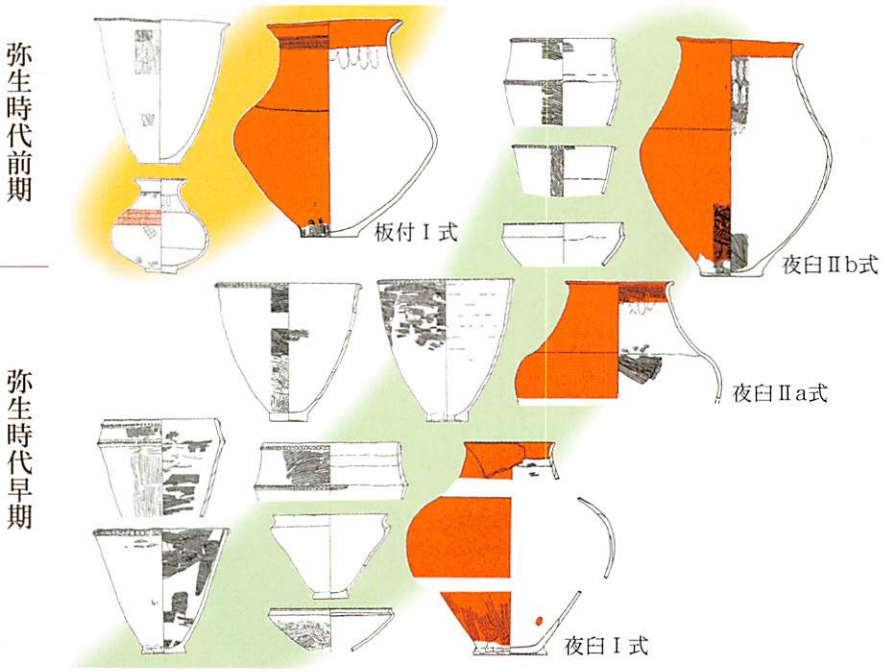
板付遺跡

弥生館図録

THE RUINS OF ITAZUKE

I 板付遺跡のあゆみ

慶応 3 年(1867)：通津寺境内より銅矛 5 本出土(通津寺過去帳)
大正 5 年(1916)：板付田端の甕棺墓地(墳丘墓)より銅剣、銅矛が出土
昭和 25 年(1950)：中原志外顕氏、縄文土器(夜臼式土器)と弥生土器(板付式土器)の共伴を確認
昭和 26 年(1951)～昭和 44 年(1969)：日本考古学協会の発掘調査
昭和 46 年(1971)：板付団地建設工事に伴い緊急発掘開始
昭和 51 年(1976)：国史跡に指定
昭和 53 年(1978)：「縄文水田」発見
平成 4 年(1992)：復元水田と弥生館オープン
平成 7 年(1995)：環濠と竪穴住居の復元オープン
平成 26 年(2014)：竪穴住居のリニューアル



II 夜臼(ゆうす)式土器と板付(いたづけ)式土器

夜臼式土器とは，福岡県糟屋(かすや)郡新宮(しんぐう)町所在の夜臼遺跡から出土した土器を標識とする土器様式で，甕などの口縁部や胴部に刻み目のある突帯をめぐらせているのが特徴です。そのため，刻目突帯文(きざみめとったいもん)土器とも呼ばれます。従来の縄文式土器の系譜を引くものです。

一方，板付式土器は板付遺跡で出土した土器を標式とする弥生時代前期の土器様式で，夜臼式土器など，これまでの土器とは器形や製作技法が大きく異なっています。その中でも最も古い板付Ⅰ式土器は，弥生時代の前期初頭に位置付けることができ，発掘調査では夜臼式土器の新しい段階(夜臼Ⅱb 式)のものと一緒に出土することが確認されています。

かつて，板付Ⅰ式が出現する以前の夜臼Ⅰ・Ⅱa 式といった刻目突帯文土器のみが存在する時期(刻目突帯文土器単純期)は，縄文時代晩期の終末段階であるとみなされてきました。板付遺跡で見つかった水田に対する「縄文水田」という呼び名は，このことに由来します。しかし今日では，この段階にはすでに，玄海灘沿岸地域では，弥生時代を特徴づける諸要素(水田農耕・環濠集落・大陸系磨製石器など)が出そろっていることが明らかになっており，現在この刻目突帯文土器単純期をもって，弥生時代の開始(弥生時代早期)とみなす見解が優勢になっています。

板付遺跡発見と調査の歴史

1867(慶応3)年　通津寺境内より銅矛5本出土。(通津寺過去帳)

1916(大正5)年　板付田端(通津寺南東)より甕棺(甕棺墓地・墳丘墓)が出土。その中から銅矛・銅剣7本発見。

1950(昭和25)年　中原志外顕氏、板付の畑で縄文土器(夜臼式土器)と弥生式土器の共伴を確認。

1951(昭和26)年　日本考古学会の発掘調査。(4年間、明治大学杉原教授を代表)－29基の貯蔵穴と6基の井戸を発見。紡錘車・磨製石器など出土。弓状環濠より日本種の炭化米が出土。(甕棺・土器類出土。)

1967(昭和42)年　「板付遺跡保存会」の発足。

1968(昭和43)年　「日本考古学協会農業部会」の発掘調査。(明治大学が中心)、「環濠集落」を確認。
(～昭和49年まで)

1969(昭和44)年　「福岡市教育委員会」の調査。竪穴住居跡1軒確認。

1971(昭和46)年　建設予定地(板付団地・板付北小学校)の発掘調査。木杭や丸太材で補強した用水路や畦などの遺構、木製農具、甕棺墓や土壙墓(弥生時代の共同墓地)、貯蔵穴群の発見。

1976(昭和51)年　「国指定史跡」に指定。

1978(昭和53)年　G7a地区の第7-9層水田耕作土で板付Ⅰ式と夜臼式土器が一緒に発見される。弥生人の足跡発見。縄文水田発見－最下層の水田・水路、井堰、取排水口、木杭や矢板で補強した畦に囲まれた長方形の水田、木製農具、石包丁(穂摘み具)、炭化米等が出土。

1986(昭和61)年　52戸の家屋と通津寺の移転交渉。27,656㎡の用地取得完了。

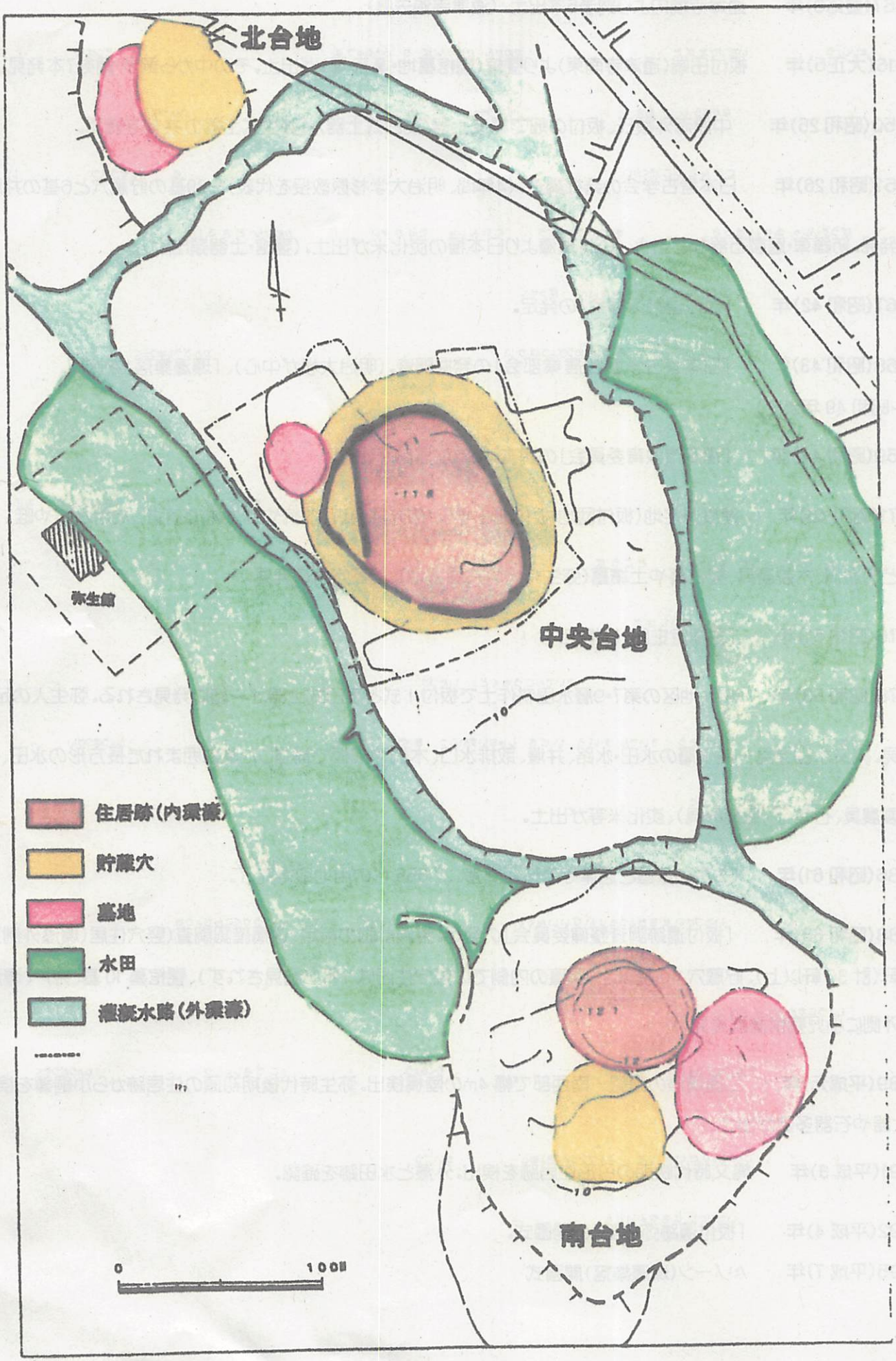
1988(昭和63)年　「板付遺跡調査整備委員会」の発足。整備計画の策定、遺構確認調査(竪穴住居(環濠外側)11軒(計30軒以上)、貯蔵穴40基以上、環濠の内側では竪穴住居は1軒も発見されず)、甕棺墓10基、井戸、環濠の外側に小児甕棺墓群発見。)

1989(平成元)年　二重環濠の確認－南西部で幅4mの陸橋検出。弥生時代後期初頭の住居跡から小銅鐸を検出。土器や石器多数が出土。

1991(平成3)年　縄文時代晩期の円形住居跡を検出。外濠と水田跡を確認。

1992(平成4)年　「板付遺跡弥生館」の開園式。

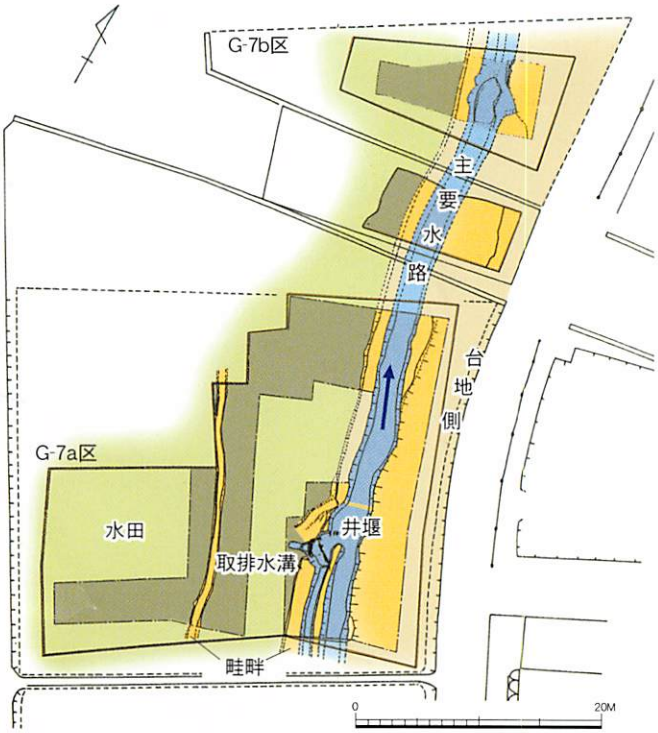
1995(平成7)年　Aゾーン(環濠集落)開園式


北台地
中央台地
南台地
弥生館
住居跡(内環濠)
貯蔵穴
墓地
水田
灌漑水路(外環濠)
0
100m

Ⅲ 板付遺跡の概要

古くから東アジア世界の玄関口として栄えた福岡市には，交流の歴史を物語る遺跡の数々が存在しています。その中でも板付遺跡は，現代日本の原風景に通ずる「最古の農村」の姿を明らかにした遺跡として有名であり，昭和 51 年(1976)に国の史跡に指定されました。弥生時代前期を代表する土器様式である板付式土器の標式遺跡でもあります。

板付遺跡は，福岡平野の中心を流れる御笠(みかさ)川・諸岡(もろおか)川にはさまれた標高 12mの台地上にあります。この台地部分は大きく３つ―北台地・中央台地・南台地―の単位に区分することができ，台地の周囲に広がる低湿地は水田として利用されました。大正５年(1916)に板付田端で発見された銅剣・銅矛が学会誌に報告され，遺跡の重要性は認知されていましたが，広く注目を浴びるようになったのは，昭和 26 年(1951)から継続的に行われた日本考古学協会を主体とする発掘調査以降のことです。この調査により，板付遺跡の集落は弥生時代前期初頭の環濠(かんごうしゅうらく)集落であることが分かりました。



Ⅳ 環濠集落以前のムラ　―弥生時代早期―

水　田

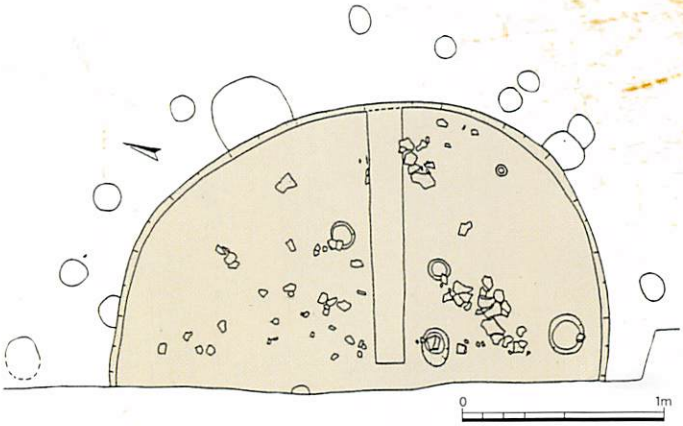
昭和52～53年(1977～1978)，かつての台地縁辺の低湿地にあたる，環濠集落から南西方向へ70mほど離れた地点で発掘調査が行われました(G7-a・b区)。調査の結果，環濠集落の営まれた弥生時代前期初頭と，さらにさかのぼる弥生時代早期の水田，およびそれに付随する井堰(いせき)や水路といった灌漑(かんがい)施設を確認することができました。

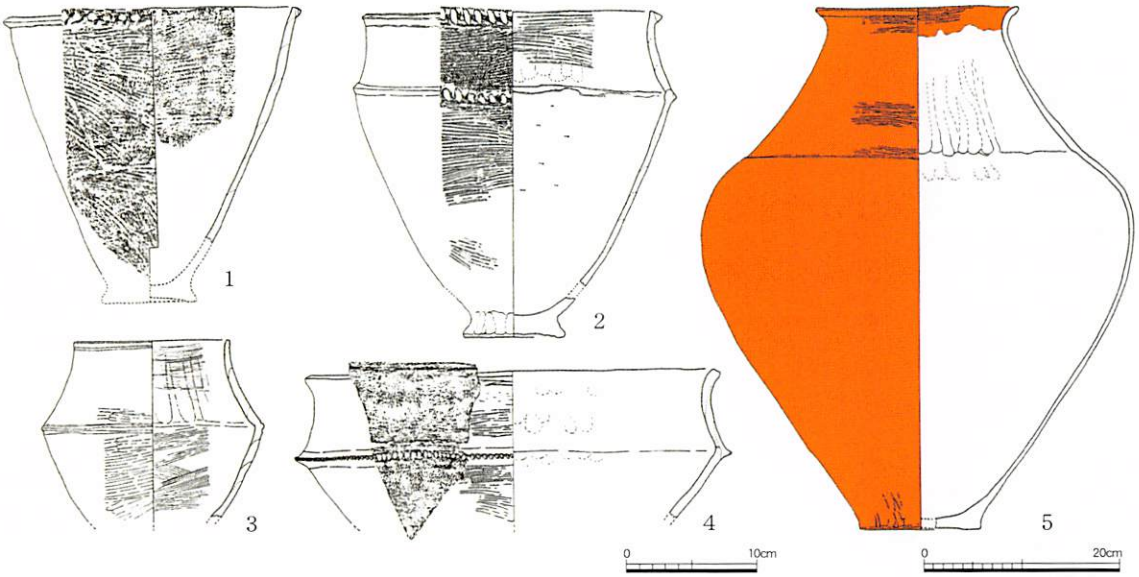
弥生時代早期の水田は，稲作開始期の初現的な水田にもかかわらず，構造的には今日の水田と変わりのない，完成されたものでした。水を取排水する主要水路は，幅約2m，深さ1mで，直線的に南北方向へ伸びています。これは人力で掘削されたものです。水路の南寄りには井堰が設置され，その上流には水口と排水路がありました。水田の畦畔(けいはん)は主として土盛りによるもので，部分的に杭や矢板で補強がされていたようです。

弥生時代早期の水田発見はこの板付遺跡が日本で初めてのことで，当時は「縄文水田」と呼ばれ，新聞紙面をにぎわせました。

取排水溝

水路の様子

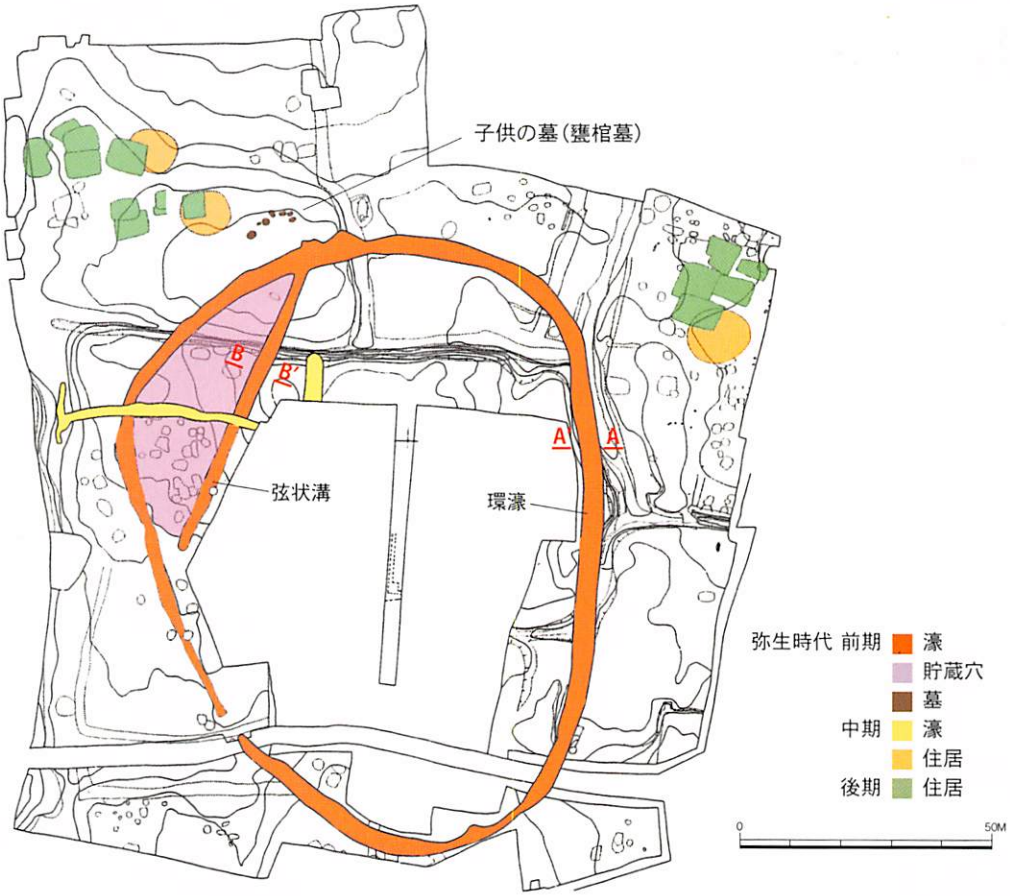




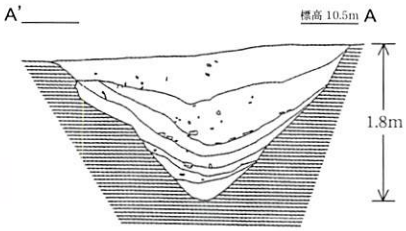
集　落

G7–a・b区における水田遺構の調査によって，板付遺跡における人々の営みは，環濠集落の形成された弥生時代前期初頭をさかのぼる時期（弥生時代早期）にはすでに開始されていることが明らかとなりました。その後の発掘調査により，当時の人々は環濠集落から北に100mほど離れた台地上で生活をしていたことが分かりました。第16・60次調査では，円形の竪穴住居1棟，掘立柱建物（倉庫）3棟が確認されています。また，細い溝が円形にまわる遺構が2基，確認されていますが，これは家畜小屋であると考えられています。

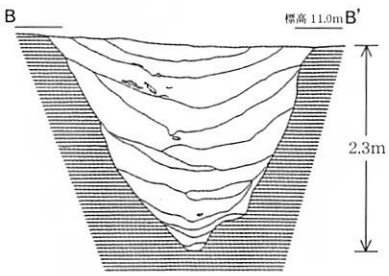
弥生時代早期の集落はまだまだ不明な点が多く，今後の調査の進展が期待されます。



環濠の断面



環濠



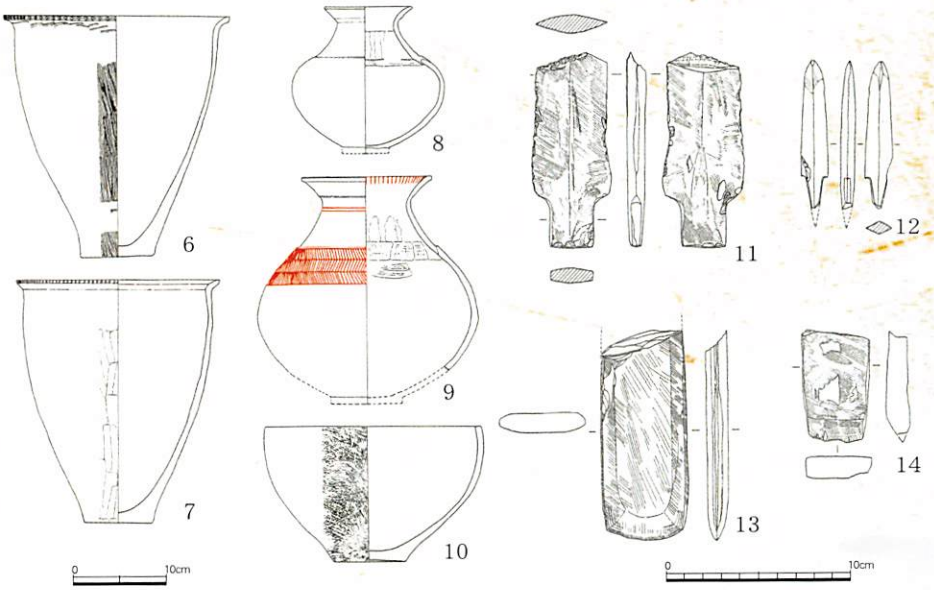
弦状溝

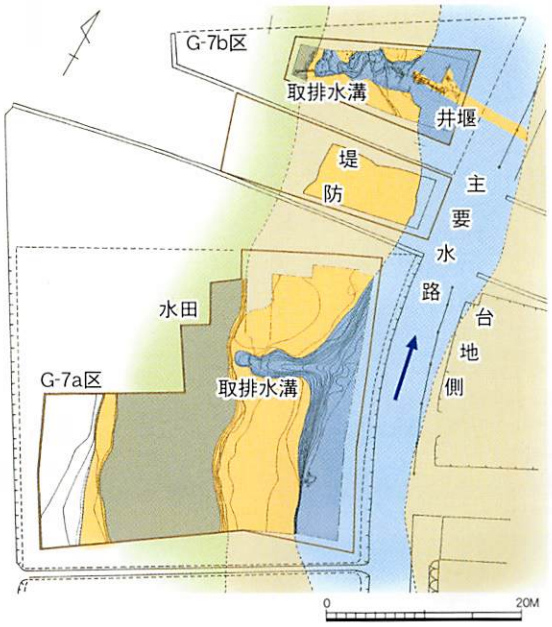
V 環濠のムラ　―弥生時代前期―

環濠集落

弥生時代前期になると，中央台地において，環濠集落が出現します。発掘調査によれば，環濠は南北 110m，東西 81mの平面卵形をしており，濠の規模は幅 1.5～4.5m，深さ 0.7～2.3m で，断面 V 字形に掘り込まれていました。当時の姿を復元すれば，幅 6m，深さ 3～3.5mほどになるでしょう。環濠の両側には，掘削の時に掘り出した土を盛り上げ，土塁を築いていたようです。また，環濠南西部に一か所，幅４m の掘り残し部分（陸橋）が確認できました。これが集落への出入口です。環濠内側には住居が存在したはずですが，すでに削平を受けており，発掘調査でも確認することはできませんでした。環濠内の北西部には直線的な溝（弦状溝）により，半月形に区画されている部分があります。ここでは多数の貯蔵穴が発見されており，食料など物資の貯蔵にかかわる区画だったことがわかります。ムラの人々が共同で使用したものでしょう。

環濠は弥生時代中期には埋没し，環濠集落という集落形態はなくなってしまいます。しかし集落そのものは，その後中央台地や南台地と場所を変えながら，弥生時代中・後期を経て，古墳時代にいたるまで存続しました。





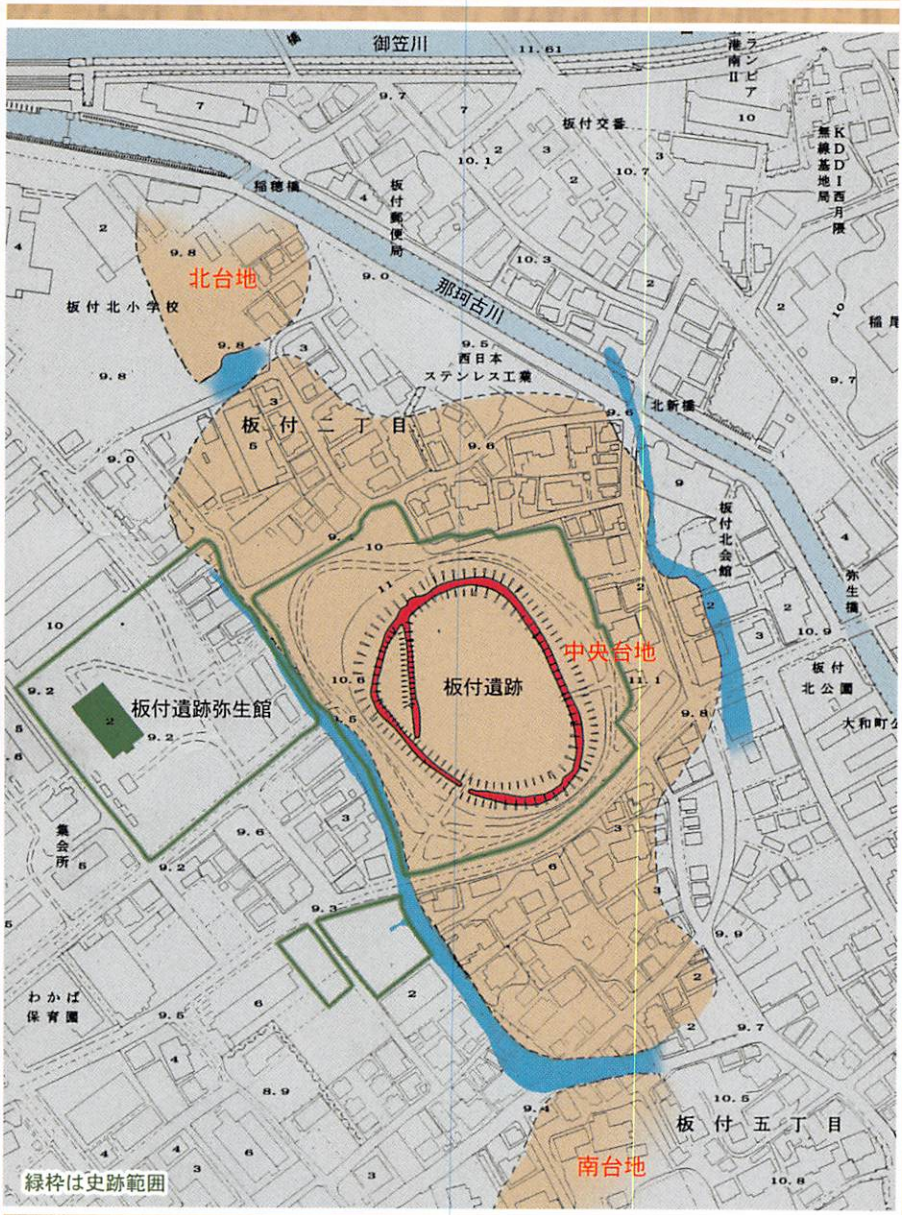
水田調査の様子

取排水溝

水　田

G7–a・b区における弥生時代早期の水田の上には，弥生時代前期の水田がありました。これも井堰や水路などの灌漑施設や畦畔を持ち，構造的には全く同じです。

しかし，規模の上では比較にならないほど，大がかりなものに変貌しています。台地際に掘削された主要水路は幅10m，深さは2m以上となり，それに伴い，流路を止める井堰などの構築物も強固なものになっています。



福岡市 板付遺跡弥生館

〒816-0088 福岡市博多区板付三丁目21-1　TEL092(592)4936

開館時間
午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

休館日
年末年始
(12月29日～翌年1月3日)

入館料
無料
(団体で見学する場合は
あらかじめご連絡ください)